

## 幕領を願う

宝永七年（一七一〇年）、村上藩十五万石のうち十萬石が幕領となりました。このとき茶曾根村はこれまでと同じ村上藩領と決まったのです。

しかし、茶曾根をはじめとする村上藩領四万石の諸村の百姓は、幕領を願いました。その理由は藩領よりも幕領のほうが負担が軽かったためです。農民にとって税金や労務提供は、大庄屋の言うがままの過酷な負担だったのです。そこで農民たちはその実情を幕府に直訴したり納税拒否などの実力行使に出たのです。

このため大庄屋や小庄屋（名主）は騒起になって押さえようとしたが、うまくいきません。幕府から代官が出張し、事情聴取をするほどでした。

## 裁判へ

当時の法律では、このような騒動の首謀者は死刑、所轄の村役人は重追放、または所払いに処されるほどの重罪でした。しかし「幕府を慕う」という騒動でしたから、幕府側も柔軟に対応したようです。

そこで、幕府首脳部は早期の

決着を図ることを決定し、裁判を開くことになったのです。現在の検察官兼裁判官に当たる横田備中守、鈴木飛騨守などが真相究明の任に就くことになりました。

農民の要求はすでに取り調べで分かっていたことから、今度は大庄屋、小庄屋を江戸に呼ん



で、事情を聞くことになったのです。形式は事情聴取でしたが実質的には裁判でした。この裁判記録が関根家に伝わっています。

## 農民の「勝訴」

事情聴取は、正徳元年（一七二一年）八月に横田邸で開廷されました。そのことにより大庄屋、小庄屋の責任感の欠如が明

らかになりました。次いで九月にはさらに微細な点についての事情聴取がありました。このとき初めて大庄屋の権限が予想をはるかに超えて大きなものであることが判明したのです。

判決は十月に言い渡されました。形の上では農民の「処罰」という決着でした。しかし、内容は大庄屋、小庄屋には権限の縮小、農民には実質的な負担の軽減というもの。農民は事実上の勝訴を勝ち取ったのです。

## 相互監視の強化へ

余談になりますが、文書の端はしに「ゼンが無い」の愚痴が聞こえるのです。この裁判で大庄屋、小庄屋は旅費・滞在費に苦慮したようです。現在の金額に換算すれば何百万円という費用ですから、たいへんだったのでしよう。

騒動はいちおう、決着しました。しかしこれ以後、隣組を主体とする五人組の制度はてこ入れされたのです。そして相互監視、密告の制度などが強化されていき、だんだん窮屈な社会になっていったようです。

（詳しくは発売中の「白根市史」巻七、第四章茶曾根を参照してください）

# いつまで続くか「みの口三差路」

## 私の思い

あの時この場所



みの口三差路

終戦後すぐの「みの口三差路」は、砂利道で、まだ車も少なく、子どもごろのよき遊び場でした。のんびりしていて、静かで「ただ広いな」という感じ。

私の家は、道路の端にあり、車が石を飛ばすため、よく窓ガラス

## 語る人

熊谷忠一郎さん

（みの口・五十二歳）



## あなたの思い出を

お寄せください

市内をはじめ、市外、県外、海外の心に残る思い出をお寄せください。あて先は、〒950-112 白根市大字白根1-235 白根市役所企画調整課広報広聴係（☎033-333-3333）です。お便りお待ちしております。

## 日赤 家庭看護法

老いを看護する

No. 14 私の体験①

青木きよ子さん・談  
（大通1丁目）



生きていくには何も言わなくてもいい。言えれば自分が必要ならなくなるから。

## 思いやりの心を...

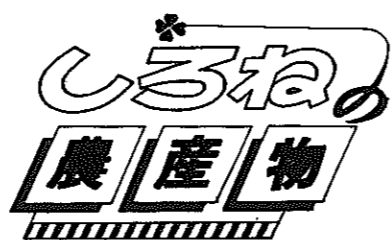
だけれどいつかは年を取る。自分がお世話をされる側に立つんです。だから「倒れたら施設に行けばいい。嫁の世話にはならない」といってしまいませんか。お嫁さんをたいせつにしていれば間違いないですよ。

私の経験からですが、いくら同じ家に住んでいると言っても、世話をしてくれる人には、品物でも金銭でも、気持ちを形で表すことが大事だと思います。日ごろの思いやりが、いかにたいせつかということですね。

お世話をしているときは夢中で一生懸命でした。そういうときに心の中を打ち明けられる友人がいるというのは心強いものです。美しく老いたいですね。

## 亡くなった後...

つらかったのは、夜になると騒ぎ出すこと、そして私に代わってめんどろを見てくれる人がいなくなったこと。そして何よりも、亡くなった後、家から出た人たちから「なぜあんな病院に入れた」と風当たりが強くなったことでした。



大葉の本場は愛知県。全国の産地の八〇％は愛知産だそうです。その愛知では、秘密主義に徹し、産地の農業改良普及所でも栽培方法が分からないといひます。種を分けてもらうなんてとてもできない状況でした。白根市の大葉はその愛知県から、徹しいチェックをかくくぐって持ってきたもの。ちよつとした産業スパイものようですが、十四、五年前の話ですから時効にしましょう。

そんなことで、白根に入ってきた大葉。栽培方法も当然分からないわけですから、生産農家は失敗を重ねながら粘り強く取り組んできました。ようやく市場出荷できるような体制になると、今度は愛知県の逆襲。同じ出荷市場に、低価格になることを承知で、大量に出荷してきました。いわゆる産地つぶしです。白根の大葉は、そんな産地競争にも打ち勝ち、生産が続けられています。

## 生産者の声



難波与一郎さん  
（犬塚新田・56歳）

付加価値を高めるため、大きさをそろえ、バックに入れて出荷します。すべて手作業ですから手間がかかります。出荷の最盛期は、七月から八月。ですから、大葉の栽培農家にお盆はなです。新鮮さが勝負です。